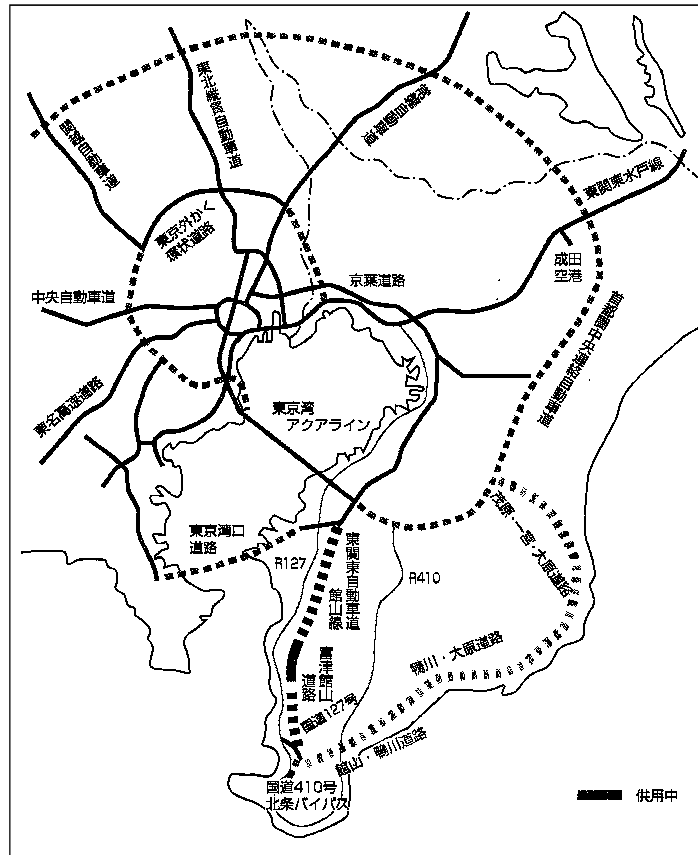


第1章 地域特性・観光特性と地域課題

図表 1-2 館山市の位置（その2）



資料：館山市「館山市総合計画」(平成13年3月)

(2)沿革

神話では、天富命あめのとみのみことが黒潮に乗り四国阿波の忌部一族を率いてこの地に上陸し、房総半島の開拓が始まったとされている。古代から海を道として、様々な地域との活発な交流が行われてきた。

戦国時代には文豪・滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』のモデルとなった里見氏が、水軍を武器に東京湾の制海権を握り、館山城を拠点に城下町として栄え、都市としての姿が形成された。

江戸時代の初期、里見氏の改易後は、幕府の公領、諸藩の私領などとなり明治を迎えた。

昭和の戦時期、とりわけ太平洋戦争の時には首都圏防壁の要塞基地としての役割を担い、現在もその遺跡が多数残されている。

昭和29年の市町村合併促進法により、周辺6か村を合併し現在の館山市となっている。

現在は一人ひとりが心の中に思う「ふるさと」を基本理念に、「館山湾の活用と海辺のまちづくり」など「交流と交易のまち館山」を目指している。

(3)自然・土地条件

房総半島は海拔400m未満と低い標高ながら、山間部は入り組んだ地形のため山深い印象を与える。海岸部では小規模ながらも険しい海食断崖が発達し、漁港を中心とするいくつもの小さな入江

が続く景観となっている。

気候的には、房総半島が太平洋に向かって突きだした形状で、房総丘陵を背負った地形の効果もあり海洋上からの気象の影響を受けやすい。このため、関東の内陸に比べ温暖な気候で、植生などに顕著な違いがみられる。

本市は31.5 kmの変化に富んだ海岸線を有し、海岸線一帯は南房総国定公園に指定されている。また、日本の道100選、白砂青松100選、森林浴の森100選など優れた自然環境が温存されている。

(4) 社会・経済条件

人口は51,831人（平成15年1月1日、住民基本台帳人口）で、年々わずかではあるが減少している。逆に高齢者人口は徐々に増えており、高齢化率は26.4%に達している。

産業別就業人口は第3次産業が約69%、第2次産業が約20%、第1次産業が約11%と商業を中心とした第3次産業のウェイトが高い。

生産額などでは商業販売額が1,000億円以上で他産業より群を抜いているが、観光消費額も80億円近くあり農業の粗生産額を上回っている。

本市は安房地域の中核都市であり、周辺地域の商サービス機能や雇用の場としての役割を担っているが、交通アクセスの向上に伴い千葉や東京方面への顧客の流出がみられる。

文化面では昔からの海を介した交流文化や「里見氏」を軸にした歴史文化などの資源とともに、姉妹都市として国内では山梨県石和町、外国では米国ワシントン州ベリンハム市と結び、近年豪州ポートステューブンス市との友好都市を締結するとともに、鳥取県倉吉市、同県関金町、群馬県榛名町との「里見氏」にまつわる交流を推進するなど、国内外との文化交流の促進を図っている。

図表 1-3 地域の主要指標

区分		数値
人口 (平成15年1月1日)	人口	51,831人
	高齢化率	26.4%
産業別就業人口比率 (平成12年国勢調査)	第1次産業	10.8%
	第2次産業	19.8%
	第3次産業	69.1%
生産額等	農業粗生産額 (平成12年)	74億円
	漁獲水揚げ高 (平成12年)	9億円
	商業販売額 (平成11年)	1,228億円
	製造品出荷額 (平成11年)	313億円
	観光消費額 (平成13年)	77億円

資料：館山市

2 観光特性

(1)観光対象

本市の海岸一帯は南房総国立公園に指定され、温暖な気候と相まって優れた自然観光地及び避寒地としての観光適性を有している。しかし、単体資源としてみると観光資源評価で高いものはなく、利用の面からみた場合「南房パラダイス」「いちご狩り」「海水浴」「花畑観光」などが主たる対象となっている。

図表 1-4 館山市の資源評価

分類	名称	資源ランク
社 寺	崖 ノ 観 音	B
地 域 景 観	房 総 の 花 畑	B
海 岸	鏡 ケ 浦 海 岸	C
	平 砂 浦	C
島	沖 の 島	C
岬	洲 崎	C
観 覧 施 設	県 立 安 房 博 物 館	D

(注) 資源ランクは、(財)日本交通公社による評価。B：県内の誘客力を持つ、C：市内の誘客力を持つ、D：その他

資料：(財)日本交通公社

(2)宿泊施設

本市は周辺地域に比べ、宿泊施設の立地が多く、南房総の宿泊基地としての性格を有しており、施設の魅力アップや体験メニューの拡充など、観光ニーズに対応すべく取り組んでいる。

また、本市には企業・団体の保養所の立地も多くみられ、これらの施設利用客はリピーターの客層として重要であるが、近年保養所の撤退なども一部みられる。

図表 1-5 宿泊施設の整備状況

区分	ホテル・旅館		公的施設		ペンション	民宿
	施設数	室数	施設数	室数	施設数	施設数
館山市	18	520	2	42	22	100
白浜町	5	213	0	0	1	51
千倉町	8	143	0	0	3	70
鴨川市	14	559	1	27	9	119

資料：館山市・館山市観光協会「館山市観光振興基本計画」(平成14年3月)

図表1-6 館山市の観光資源・施設分布



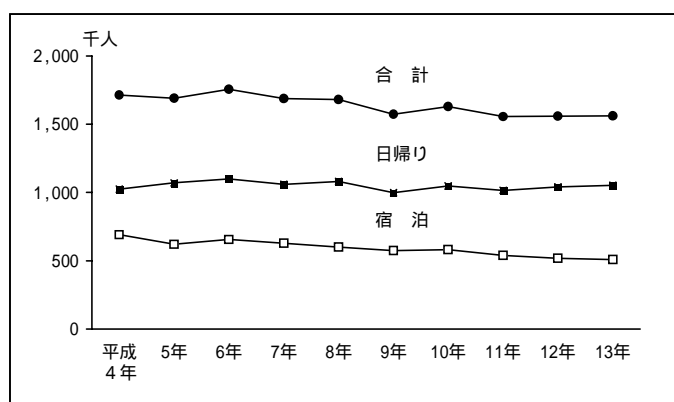
(3) 観光利用の状況

本市の観光入込客数は、平成13年において総数で156万人、内、日帰り客が67%を占めている。

時系列的な推移をみると、バブル崩壊以降徐々に減少している。日帰り客は比較的安定した需要を吸収できているが、宿泊客の減少が続いている。

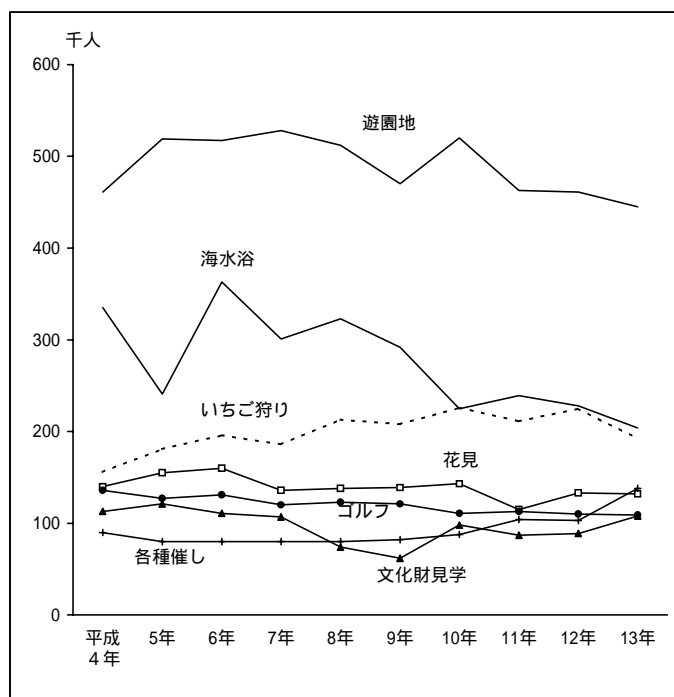
主要な目的別の入込状況は図表1-8に示すとおりであり、最も多いのは「遊園地客」で約45万人で、その他は10～20万人前後の利用客が多い。その中で比較的安定した伸びをみせているのは「いちご狩り」で平成13年には19万人でほぼ「海水浴」と同じとなっている。

図表1-7 館山市の観光入込客数の推移



資料：館山市

図表1-8 目的別観光入込客数の推移



(注) 平成13年で10万人以上の入込客があるもののみ
資料：館山市

また、本市の観光客の特性を館山市港湾観光部観光課が行ったアンケート調査結果から引用すると次のような点が特徴として挙げられる。

図表 1-9 観光アンケートからみた館山市の特徴

発 地	千葉県内が31%を占め、千葉・東京・神奈川の1都2県で78%を占める。
客 層	「2人」が46%、「4人」が18%、「3人」が16%で、いわゆる小グループで80%を占める。同行者もこれに対応し「家族」が62%と圧倒的に高く、次いで「友人」が26%となっている。
性別・年齢	性別には大きな違いはみられず、「女性」が52%に対し「男性」は48%である。年齢層で見ると「50代」が25%で最も多く、次いで「30代」の21%となっている。
リピーター度	「4回以上」が36%を占め、かなりリピート率が高い。
利用交通機関	「自家用車」が48%と最も高いが、「電車」も41%を占め、電車利用が比較的多いのが特徴といえる。
情報の入手先	「新聞」28%、「テレビ」16%とマスメディアからの情報入手が主であり、「インターネット」は10%に留まっている。
館山を選んだ理由と目的	館山を選んだ理由は「花・果実狩り」が21%で最も多く、次いで「近いから」12%「海（海水浴含む）」が10%となっている。目的は理由にほぼ対応し「花・果実狩り」35%、「海水浴・マリンスポーツ」18%、「施設見学」12%となっている。
立ち寄り地点と滞在時間	1人平均立ち寄り地点数は「2.8カ所」で、1カ所当たりの平均滞在時間は「90分」となっている。
観光消費額	交通費も含めた一人当たり観光消費額は「14,615円」であり、入園料・飲食費・土産品等の地元へ落ちる金額だけみると「8,300円」となる。（市の観光統計では一人当たり消費金額は「4,926円」となっている。）

(注) 調査時期：1回目(平成13年5月26日、土曜日)、2回目(平成13年8月4日、土曜日)、3回目(平成13年11月10日、土曜日)、4回目(平成14年2月23日、土曜日)。サンプル数：800票配布、367票回収
資料：館山市

3 地域課題

本市を含む南房総地域は、温暖な気候や南房総国立公園の指定にみられるように、優れた自然環境を有し、背後地に東京圏という膨大な市場を抱え、立地条件にも比較的恵まれた地域である。

さらに、館山自動車道の延伸や東京湾アクアラインの整備により、東京や神奈川とのアクセスが向上し、東京などからの日帰り圏に南房総一帯を包含することになった。

しかし、このことは、立ち寄る魅力がない地域にとっては通過されてしまう条件が整ったということでもある。

このような中で、本市における観光・レクリエーションの受け入れ体制は、従来からの海水浴とサイトシーング型の花観光への依存が強い。今日、単に海で泳ぐだけの海水浴は全国的な動きの中でも徐々に減少しており、“海のそばでの多彩な観光活動”が楽しめない観光地は敬遠されてきている。また、花観光も単に花を見るだけ、あるいは施設園芸的な花鑑賞の観光は徐々に少なくなっており、例えば花を摘む、花を食べる、ドライフラワーなどの花体験をする、花について学ぶといった、花を素材にした多彩な楽しみ方が求められている。

本市で現在、唯一伸びているのは「イチゴ狩り」であり、これは体験観光の一つである。逆にいえば需要の変化に対して、本市における対応は必ずしも的確にはなされていない、ということができる。

このような状況を踏まえ、本市も最近「体験・学習観光」への取組がみられ始めた。海や里山や産業資源などを活かした体験とともに、本調査研究のテーマである“戦争遺跡”についても「歴史体験学習プログラム」の一つとして「戦争遺跡見学」が取り上げられた。

本市の観光振興における課題は、これまでの海依存あるいは資源依存型から脱却し、資源を活用していかに付加価値を高めるかという展開が必要であり、観光地としての「物語化」や「体験化」の仕組みを作っていくことである。そのことにより、新しい館山の観光魅力を創出でき、結果として域内への吸引力あるいは域内での滞留性を高めていくことになる。